

主 題：あなたは特別な人

聖書箇所：ペテロの手紙第一 2章4－10節

ペテロは私たちに、神のすばらしい救いに与った者としてこの世を生きて行きなさいと教えてくれています。聖さを求めて歩んで行くように、兄弟姉妹が愛し合って歩むようにと勧めてくれました。そのような歩みを私たちが行くためには、神のみことばが必要であることをこれまで学んできたのです。ペテロはさらにこの4節から、別の励ましを与えてくれます。私たちがますます神に喜ばれる歩みをしてゆくために必要なことは何でしょうか？2：4に「主のもとに来なさい。」とあります。これは救いのことを教えているのではありません。個人的に習慣的に主との交わりを持ちなさいということです。私たちが神との交わりを優先してもって行くために必要なこと、これを覚えていただきたいのです。この主との交わりを、大切な神から与えられた恵みと感じて実践して行くために、次の二つのことを覚えてください。

1. 主のすばらしさをより深く知ってゆくこと
 2. 主によって変えられた自分自身をしっかりと知ること
- きょうは、このことを学んでゆきましょう。

☆主のすばらしさをより深く知ってゆくこと 4節

パウロはもっと神のことを知りたいと願っていました。私たちがますます成長し、神に喜ばれる歩みをしてゆくために、私を愛し救ってくださった神はどんなお方なのかを知って行くことが必要なのです。神への知識が増し加わって行くことによって、私たちの日々の生活に変化が起こって来るからです。神がどのようなお方かを知るほどに、どんなに大きな恵みをいただいたかが分かるのです。そして、それをいただくには、この私はいかに相応しくないかということも分かります。そのためにも、私たちは神を知って行くことです。ペテロはこの2：3で「…主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。」と言っています。神はいつくしみ深いお方です。そして4節へと続きます。「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。」と。ここでペテロは

主は、父なる神には『尊い』存在であると言います。父なる神に選ばれた方なのです。

「生ける石」とは、そこにいのちがあることを明らかにしています。だから、信じる者にいのちを与えることができるのです。「人には捨てられた」とは、人々は信じる価値がないとする、罪の赦し、永遠の救いはいらぬというのです。しかし、イエスは神には尊い選ばれた石なのです。「尊い」とは価値がある、高価であるということです。このようにすばらしい神をより深く知ってゆくために、私たちは神と交わる時間をとることが必要です。みことばを瞑想しつつ神をより知ってゆくことです。

☆主に変えられた自分自身をしっかりと知ること 5節

(1) 私たちは主に属する者となりました

5節「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」と、ここにも「生ける石」とあります。これは複数です(4節の「生ける石」は単数)。救われた者すべてを指しているのです。イエス・キリストを信じて救われた者はすべて「生ける石」、すなわち、新しいいのちが与えられたのです。成長して行くのです。神のものとしたのです。

(2) 主に似た者です

5節の「霊の家」とは神の宮、神殿のことです。この当時の人たちはそれを目にしていたのでよく分かりました。神が宿られたところ、神はどこにでもおられますが、神の臨在を現わします。「築き上げられなさい」は、神殿が神の栄光で満ちたように、私たちが神に用いられることによって、私たちのうちに神が住んでおられることが明らかになり、神の栄光が現わされるようにというのです。神はそのために私を救い今生かしておられるのです。あなたは「霊の家」であると。神によって成長して行くならそこに神の栄光が現わされるのです。そして、成長して行くためにみことばが必要なのです。これは救われた私たち信者と教会の責任です。

I テモテ 3 : 15にはこのように書かれています。「それは、たとい私がおそくなつたばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」と。これは教会とはどういうものかを説明しています。「生ける神の教会」の責任と特徴です。この「生ける神の教会」には冠詞がありません。ということはそれがどういう特徴をもつかを示すのです。

1) 教会は神の所有物です。生ける神のもので。だから、所有者である神のすばらしさ、栄光を現わすのです。個人としても教会としても。

2) 教会の神に対する責任を示します。教会が真理の柱、土台であると言います。真理、すなわちみことばですが、その真理を支える柱、土台だと言うのです。これは、しっかりみことばに立つことを言っています。教会は真理であるみことばがしっかり語られていることが必要なのです。みことばに立ち、それを支えることです。

神が私を今生かしてくださっているのは、私を変えてみことばに立つためです。そして、キリストに似た者へと変えられて行くのです。

(3) 主に仕える者となりました

「聖なる祭司として…霊のいけにえをささげなさい。」とあります。あなたがたは祭司、しかも聖い祭司だと言います。9節には「王である祭司」とあります。イエスに仕える祭司です。旧約の時代の祭司、モーセやアロンは神と人との仲保者でした。人々の罪のとりなしをし、人々に神のおきてを教えました。そして、いけにえを捧げるという務めがありました。新約時代の私たち、イエス・キリストを信じる者はすべてが祭司です。だから、人々のためにとりなしをするのです。救いに与るようと。そして、神のみことばを人々に伝えて行きます。また、自らをいけにえとして捧げて行きます。「霊のいけにえ」を捧げるのです。

●「霊のいけにえ」を捧げるとは？

1) 神を誉めたたえることです。感謝をささげるのです。愚痴や不満ではありません。へブル人への手紙 13 : 15に「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」とある通りです。そして、

2) 人に良いことをする、分け与えることです。へブル 13 : 16に「善を行なうことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」とあります。善を行なうことと持ち物を人に分けること、と言います。「霊のいけにえ」は、

3) 心からなる犠牲的なささげものです。形式的ではなく心から喜んで、そして、最良のものを捧げるのです。残り物を捧げるようなことはしません。ピリピ 4 : 18「私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。」と、パウロが困っていたとき、ピリピ教会の人たちは乏しい中からでも喜んで捧げました。神からいただいたものを神へお返しするのです。神はその心をご覧になります。

4) 奉仕、与えられた賜物をもって教会に仕えるのです。その責任があります。救いのメッセージを語って行くのです。

5) 伝道、人々を救いへと導いて行くのです。ローマ 15 : 16にはこのように書かれています。「それ

も私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」、パウロの祭司としての務めは、みことばを語ることでした。人が救われることこそ神への供え物です。

6) 自分自身をささげることです。ローマ 12 : 1に「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とあります。自分のすべてを神にささげるのです。神に委ねた生き方こそ真の礼拝者です。

●イエスのすばらしさと救われた喜びを思い起こさせる 6-8節

「なぜなら、聖書にこうあるからです。『見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。』 7. したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」のであって、8. 「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みこ

とばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。」
ペテロはここで再び読者にイエスのすばらしさ、そして、私たちが救われたことの喜びを思い起こさせるのです。

1) イエスは尊い選ばれた礎石です

私たちはイエス・キリストの上に立つのです。6節はイザヤ書28：16の引用です。イエスに信頼する者は、決して失望しないと。失望しないとは「恥をこうむる」ことがないという意味です。神に忠実に生きてゆくなれば恥を見ることはない、無駄ではない、というのです。これは神ご自身の約束です。私たちにとって、これはなんと大きな慰めでしょう。クリスチャンはこの世ではいろいろな摩擦があるからです。そして、「決して」とありますが、これは二つの否定語が使われています。「絶対に、絶対にない」というのです。後悔することがないのです。忠実に生きた者には主からの称賛があるのです。

2) イエスは捨てた石

これはイエスを知らない人がイエスを価値あるとは思わないことです。7節の「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」は詩篇118：22の引用です。この「捨てた」とは、調べた上で捨てるという選択をする、という意味です。イエスは必要ではないとするのです。

3) イエスは「つまずきの石、妨げの岩」

つまずき、妨げの石は道にある石、歩いているとつまずいてしまう石です。イザヤ8：14には「この方が…イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、…」とあります。イエスは妨げとなっている人の罪を取り除くためにこの世に来られたのに、彼らはつまずいたのです。みことばに従わないのです。パリサイ人がその通りです。彼らはイエスに心が開かれていないのです。そして、イエスを十字架につけてしまうことになるのです。

8節の最後に「またそうなるように定められていたのです。」とありますが、これは意味の深いことばです。人が罪を犯すことは神の定めなのでしょうか？それは違います。罪を犯すことを定められていたのではなく、さばかれることが定められていたのです。人が自らの意志で救いを拒むからさばきがあることを教えるのです。神の「定め」は、神を信じない者にはさばき、永遠のさばきがあるということです。神が救わないのではないのです。救いの選択はその人自身のものです。それが人の責任です。

祭司とされた私たちは祭司としての務めを果たしていくことです。救いはその人の選択であることをぜひ覚えてください。